

大学昇格 100 周年記念式典 座談会

2021 年 10 月 23 日開催

加藤先生：それでは今から座談会を始めさせていただきます。本来でしたらこの 100 周年記念事業の実行委員の皆さんに壇上に上がっていただいて座談をしたいところですが、感染対策等々を考えて座席からそれぞれの考えを伺っていただければと思います。まず、今の八木先生の話を受けて、あるいはそれぞれの皆様の大学昇格 100 周年に際しての想い、学友会から実行委員に加わっていただきました、東道先生から一言いただければと思います。

東道先生：僕らは花園分校で学ばせていただきました。府民や学友会諸先輩の多大な寄付のおかげとは聞いておりましたが、ここまで大変な歴史があったとは初めて知りました。八木先生ご講演ありがとうございます。分校の横にありました花園精神病棟は入学前年に取り壊され、鉄条網が張られた塀のみでした。後に先輩から聞いた話では花園と旧基礎生化学等の研究室が京都府のものとなり、その代わりに基礎二号館と講義室、病院改築等が行われたようです。現在の府立体育館/島津アリーナ京都と京都府立文化芸術会館のことです。この京都府の方針もあり花園の教養部でも学園紛争が急拡大していきました。京都府立医科大学に対する京都府の考え方、評価が大きく変わったためもあり、その後、旧立命館広小路学舎・体育館跡が大学のものとなる上に、基礎医学学舎、小児医療センター、新外来診療棟、そしてがん診療施設等も建設され今は大学昇格 100 年に相応しい京都府の大学になっており感慨深い思いです。

加藤先生：はい、ありがとうございます。次に、学生の教育に携わっておられる、教育担当の副学長橋本先生、一言お願いいたします。

橋本先生：橋本先生：八木先生の素晴らしい講演を聞かせていただきまして、私も 100 年前の出来事をほとんど知らなかったなということで大変感銘を受けました。今日、夜久先生もおっしゃっていましたが、このような歴史的な日に witness としてこの場にいられる幸せをひしひしと感じております。特に学生さんに関しては、先ほどもありましたように、私には 1 回きりの 100 周年、来年 150 周年でございますが、恐らく大学昇格 150 周年、さらに創立 200 周年の目撃者にもなれるということで大変羨ましく思っておりますけれども、今日は本当に良かったなという思いでいっぱいでございます。花園学舎に関しましてちょっと出ていましたけれども、私、脳神経外科医でございますので脳の手術の始まりがちょうどあの頃の花園分院なのですね。と言いますのは、第一外科初代の河村叶一教授が花園学舎にあった分院（精神科病棟）に附設していた手術室で、京都での脳手術を始められたという記録がございます。今日は京都府知事を始め、いろいろな皆さんと一緒にこのような会を祝えることを非常にありがたく思っていますし、ぜひ学生さんからの今後への思いを聞きたいなと思っております。

加藤先生：ありがとうございます。では吾妻看護学科長よろしくをお願いいたします。

吾妻先生：看護学科長の吾妻と申します。看護学科の教員ですので看護の歴史は 100 周年記念誌にも「府立医科大学の看護学科の歴史は看護の歴史そのもの」と書かれておりますけれども、医学科もまさに医学の歴史を背負ってこられたことを再確認しとても感銘を受けました。これからも看護学科は医学科とともに歴史を刻んでいきたいと思っております。ありがとうございました。

加藤先生：ありがとうございます。さきほどの小川瑳五郎先生が、大学昇格にあたってそれまでの医学専門学校では教育と診療には我々は絶大な自信を持っているけれど、大学に昇格すると研究というのが大きな仕事になってくる、その使命が我々に課せられているということでしたが、研究部長八木田先生この点から何かございますか。

八木田先生：先ほどの八木先生の話聞いてわかることとか、私たち日頃意識しているのですが、やはりなぜ私たちが存在しているのかということを改めて考えさせられました。京大があって府立があるということは同じでは駄目だというふうなことで、その中で研究が必要であるということも同時に述べられておりました。研究ということに関しては、非常にスコープが広い、その中で府立医大の研究というのは特に社会への還元、府民への還元ということが宿命としてやはり掲げられていると。要するに、学理と府民への貢献、社会貢献との両立が非常に難しいことをまさに茨の道だと金田先生もおっしゃっていましたが、それを我々の使命としてやはり考えなくてはいけなかったと。そういうことを非常に、改めて学ばせていただきました。もう一つ言えば、私たち府立医大はおそらく京都府からの入学者だけではなく全国から結構来ていて、それで府立医大人になって、ある意味京都府への貢献あるいは府民のためにということを通じて私達は身に付けてきたというふうに思っております。ですから本学の独自の立ち位置とか、京大とは違って府立医大があるというふうなことを、アイデンティティですね、アイデンティティとオリジナリティっていうことを非常に強く意識しました。やはり今後、私たちがどうあるべきなのかというのは考えていきたいというふうに思っております。

加藤先生：はい、ありがとうございます。ではグローバルに活躍している若手研究者の代表として樽野先生、お願い致します。

樽野先生：はい、細胞生理学教室の樽野と申します。今日は非常にたくさんの歴史の話をお聞かせいただきまして、今知らないこともたくさんありながら色々考えさせられました。私自身は医学部の学生時代から本当に息をするようにと言うか、本当に自然に研究に触れていて今世界と戦えるような研究者に育てていただいたというふうに思っていますが、今日のようなお話を聞くとやはりそういうふうな当たり前のように研究できるという環境は、先人の方々がこういった大学にさせていただいたおかげと再認識いたしました。大学になる際の大きな変革というのは100周年記念誌で奥田先生が非常に詳しく述べられていますが、学位授与ができる機関になったと、京都府立医科大学になって学位授与ができるのだと、ここで学問をするのだということが非常に重要な転機だったという話です。そういった流れで私は今こういうふうに研究できるのだなというふうに思います。そこは先人の方々が与えて下さった特権だと思います。しかしこれは特権というよりはやはり使命でもあって、この次の100年京都府立医科大学が京都府民に貢献していくにはやはり大学として臨床それから研究の両輪で回して、クリエイターあるいはエクスプローラーといった人材育成は非常に重要だと思います。こういった使命を考えながらこれからも研究を頑張りたいなと思い、そういう意識を新たに作るきっかけになりました。どうもありがとうございました。

加藤先生：ありがとうございます。では次に学生のお話を聞いてみたいと思います。医学科を代表してこの後の誓いの言葉も述べて頂きますが、医学科の井上君よろしく願いいたします。

井上さん：医学科代表の井上ちからと申します。本日は貴重なお話を聞かせていただき誠にありがとう

ございました。自分たちが受けている医学科教育というのが、非常に多くの先達の先生方のご努力と、果てしないいろいろな専門性を持った先生方のご尽力で受けさせて頂いているということが非常に身に染みてわかりました。今後も自分たちの勉学に勤しんでいきたいと思ひます。本日はありがとうございました。

加藤先生：看護学科を代表して、森さんお願いします。

森さん：看護学科4年生の森と申します。今、お話頂いたスライドの中の文字で見ると大変な歴史があるのだと思うのですが、その裏にもいろんな方々の苦勞や努力があるというのを身に染みて感じさせて頂きました。私も来年から実際に臨床で働かせて頂く身になるのですが、この大学で学ばせていただいたことであるとか、そういった医療人としての使命というのを今後、大学の設立に関わられた先人の方々や府民の方々の想いに応えられるように頑張っていきたいと改めて思ひました。今日はご講演いただきありがとうございました。

加藤先生：ありがとうございます。この座談会を最後にまとめるにあたって先ほどの挨拶に加えて、奥田実行委員長お願い致します。

奥田先生：ありがとうございます。今日は皆さんお集まり頂きまして本当にありがとうございます。100年前に大学昇格を成し遂げたとき、当時の小川校長たちは100年後の今の私たちの姿や活動そしてどのような大学になっているかということをどのように思い描いていたのか、ということに、今宵私たちは思いを馳せるべきと思ひます。同じように、今日は若い学生さんたちも多数出席してくれていますが、日々の、つまり今日・明日の勉強もしなくてははいけませんし、仕事もこなさなければなりません、ぜひ5年後、10年後、50年後そして100年後、皆さんはどのような人生を送っているのか、この大学はどのように医学・医療に貢献してゆくのか、そしてなにより皆さん自身が今後自分はどうやってゆきたいのかということ、ぜひ今日は考えて下さればと思ひます。今日のこの式典がそういう機会になれば非常に嬉しく思ひます。ありがとうございました。

加藤先生：はいありがとうございました。それではこれで座談会を終わらせていただきます。ありがとうございました。